

私が空手道部から得た事、そして卒業後の空手道人生

空手道部 前川英博（昭和 40 年卒）

空手は中国から沖縄へ更に日本本土へと伝来しました。1372 年沖縄の第 3 代王朝の察度王朝の時代に、中国の明王朝に進貢し、1392 年中国人の 36 姓が沖縄の那覇久米村に土着したがその中の人達から習ったとも、又、1404 年に中国より初めて冊封使が来琉、その時一緒に来た武官から伝わったのではないかという一般的な通説がある。その後、佐久川寛駕、松村宗棍、糸洲安恒、東恩納寛量といった名人達の流れを汲む宮城長順、摩文仁賢和、船越義珍、本部朝其、大塚博紀先生の弟子たちが大学で空手（最初は唐手）部を結成し、更に組手競技のルールを作り、昭和 32 年全日本学生空手道連盟を結成、同年第 1 回大会を開催して現在の世界に広がる空手道大会やオリンピックに繋がる基礎を築いた。

関学空手道部の誕生は昭和 24 年で、現名誉会長の井上純一先輩を中心とした数人の先輩たちの努力の賜物である。

1) 空手道を習い始めようとしたきっかけ

テレビ番組で柔道家の姿三四郎と空手家の松田源之助との果し合いの勝負を見て感動した事である。松田は投げられて負けるのだが、その動きが格好よくて将来空手を習おうと決意したのを覚えている。

2) 空手道部へ入部、その後の 4 年間の経験

1961 年立命館大学法学部と関西学院大学社会学部に合格したが、私が選んだのは関学でした。入学式の当日最初に応援団の先輩が、そして次に日本拳法部の先輩が勧誘に来られた。が、自分の思いは決まっていたのでお断りし、空手道部に入部、そして大変な日々が始まった。

イ) 痛い思い出

巻き藁突き：高さ 1.8m 幅 5cm ほどの板の上部に藁を置いてそれを縄で巻いたものを素手で突く練習。上皮が破れ、手を真っ赤に染めながら左右 200 回ぐらい突いた。消毒はヨードチンキを塗るだけ。翌日も同じ事の繰り返し。傷が治ったら又同じ事を繰り返す事で第 3 関節に仮骨が出来て拳タコができた。

ロ) 辛い思い出

時計台の前の芝生での蛙飛び 3 周（一周約 300M）。翌日には階段を這って上ることになる。そして日を変えて甲東園駅から大学の正門までの蛙飛び。これも新人歓迎会行事の一つ。五月の事だから足の裏がヤケドで皮がめくれた者もいた。でも全員が正門に到着。走る時はいつも裸足だが、繰り返す事で皮は厚くなり痛みに慣れる。当時、空手道部には靴を履いて走るという習慣はなかった。環境は明らかに身体を鍛える。合宿のつらさは格別。でもページの

げんで割愛する。

ハ) 貴重な経験

田吾作旅行（乞食旅行）という行事があり、田吾作の格好をして、学校の正門から甲東園駅へ歩き更に電車で宝塚へ、そして宝塚ファミリーランドの中を歩き回って返ってくるというなんとも格好の悪い行事だった。中には田吾作の格好で座っていて、お金を恵んで貰ったものが居た。

それを聞きつけたテレビ番組（関西テレビ、“友愛のうた”）の担当者から番組出演の話がきた。田吾作旅行でお金を集めた、そのお金を障害者の養護学校へ寄付しようという物語である。集まったお金を寄付すると共にその一部でスポーツ用品を買い、それらを持って学校を訪問した。空手道の演武をみてもらったあと、ソフトボールと一緒に楽しんだ。初めて空手の演技を見て、生徒は皆真剣な眼差しで興奮して見えた。真剣といえば、ソフトボールの時、自分は小児麻痺で足に障害のある少年と一緒に走ったのだが、その時の少年の握力の強さにびっくりしたのを今でも鮮烈に憶えている。

環境が自身を鍛えるという事を更に実感した強烈な体験だった。余分な事かも知れないが、この事で空手道部は関西学生空手道連盟から、前例のない表彰を受けた事を付け加えます。

ニ) 空手の技の工夫

現在、空手道には組手競技と形競技がありますが、自分たちの時は組手競技しかなかった。組手には約束組手と自由組手があり、約束組手は攻撃と受けの順序を前もって決めて練習します。自由組手は相手に当てない事を前提に素手・素足で相手を攻撃し、又それを防御する動作をいいます。

相手に当てられない為には、的確な防御か相手より早く攻撃する事です。その為はどうすればよいか常に考えていました。実家は商売をしていて、夜親の代わりに店番をしている時も店の前にある電信俵相手に、攻撃の仕方を練習したの事を覚えています。

私の得意技は、2年生迄は蹴りで、その後投げ技に移り、最後は前拳での上段突きと変遷しました。空手では、接近した瞬時に相手の袖とか襟をつかんで、足払いで倒し、突きで攻撃をすると、1本勝ちが出来るので非常に有効な技でした。でも、当時は誰もやっていませんでした。この技は、自分が他校との練習試合のときに、自分が蹴った足を相手に捉まれて、自分を支えているほうの足を掃われて、頭を打ち脳震盪になったのがきっかけで習得した技です。

先輩から受身を練習するようにアドバイスを受けて、その延長線で工夫に工夫を重ねて約6ヶ月後に身につけた技です。

前拳での上段突きはフェンシング部の練習を見学していたときに思いついた技でした。フェンシングでは攻撃する時、足をトン・トーンと一瞬に前に運び、剣を突き出す所作を良くします。その動きを取り入れて、相手が攻撃をしようとする瞬間に自分が構えている前拳を相手の顔面に向けて突き出すと、1本勝

ちができたのです。

実際に当たると相手は確実にダウンします。この技も当時は誰も有効技としては使用出来ていませんでした。当時の監督だった故烏野監督が試合中に猛抗議をして、審判団に有効性を認めさせたお蔭でした。

失敗から学ぶという姿勢、あたりを見回し自分の技の向上に役立つ所作がないか、常に考える姿勢が大切です。

ホ) 私の戦績

個人的には4年生のときに全日本学生空手道個人選手権大会で準優勝をした事、団体戦では主将として第8回大会で優勝に貢献した事です。

又、第1回西日本大会は準優勝でしたが、この時は3年生だけで出場した。普通は4年生に3年生を交えて出場するのだが、第1回だし、先輩に3年生だけで出たいと申し出て、OKを貰った。よく許して貰えたと思う。技術的なことは松浦先輩そしてガッツは主に故烏野監督と浅井先輩に学んだ。

この実績がその後の私の人生を決定付けます。

3) 大阪土佐堀 YMCA 空手道クラブへの入会

卒業後、私の2年先輩の浅井先輩から誘いを受けて、大阪土佐堀 YMCA 空手道クラブに入会しました。浅井先輩は非常に怖い先輩でしたが、理論家で説得力は抜群でした。空手の怖さを教えて貰ったのが浅井先輩でした。その縁で紹介されたのが大阪土佐堀 YMCA 空手クラブでした。

YMCA 空手道クラブの当時の責任者は田中さんという浅井先輩の親友でした。

田中さんは関学空手道部のOBではなかったが関学のOBでした。そして当時大阪 YMCA の体育主事は瀬戸君(桃山学院大学ボクシング部OB)といっ
て高槻高校の同窓生でした。YMCA の空手道クラブ入会后1年目だっと思
いますが、その瀬戸君からシンガポールのチャイニーズ YMCA が空手道の指
導者を探していると聞き、親の心配を振り切り応募しました。

4) シンガポールチャイニーズ YMCA へ赴任、そして空手道クラブの創設

そしてついに2年後、1968年11月にシンガポールへ出発しました。私が事
前に準備した事は英語の豆辞典を丸暗記したことでした。3ヶ月程してやっと
自分から話しかける事が出来るようになった。12月からクラスはスタートし
たが、最初から250人ぐらいの応募があり、それを月・水・金に3クラス、火・
木に2クラスと振り分けた。

練習場所は、屋外のバスケットボールコート跡地でしたが、夕方6時から
開始というとセメントのコートは日暮れてもまだ暑く、足の裏のヤケドに苦し
みながら殆どを日本語で指導し、部分的に英語を使用しながらのスタートで
した。練習の始めに出欠をとり顔と名前を覚えていった。

1968年当時すでにシンガポールでは韓国のテコンドゥが大流行しており、空手道では現シンガポール国首相のリー・シェン・ロン氏が少年時代に空手を習ったという糸東流空手道協会（S.K.A）が先行していて、剛柔流を広める為にはそれらの団体と競争しなければなりませんでした。

1971年オーストラリアの剛柔流の名門クラブに招待され、テレビ出演し演武する。

1972年アジア武道祭に参加。空手道の形の演武と、トイファという沖縄の古武道の武器と棒の対戦という演武と、さらにヌンチャクという古武道の武器を用いてのビン割りの演武をした。同年ビルマ（現ミャンマー）に旅行。当地の空手道の関係者から翌年に挙行される第一回アジア太平洋区の大会へ参加の可能性を打診された。

1973年にシンガポールでの第1回アジア太平洋区（A.P.U.K.O）選手権大会の開催に協力。現在のアジア大会の前身の大会である。シンガポールの監督は私が勤めた。個人・団体戦共に日本に次いで2位でした。

1974年第1回シンガポール空手道個人選手権大会を開催。私の生徒が優勝しました。

1974年末帰国。

帰国後5年毎のチャイニーズ YMCA 空手道クラブの周年行事には毎回招待されて参加した。私の帰国後2年間シンガポールで指導に当たってくれた関大空手道部のOBの堀内君共々長きに亘り交流は続いており、その後クラブはYMCAを離れたが、熱心な生徒の御蔭で2018年には50周年行事が開催される予定である。田中さん、堀内君、そして私の3人で立ち上げた實英会という空手道の団体の名の下に、会はその後ニュージーランド、カナダ、スリランカ、香港と拡張し現在も活動を続けている。

5) 帰国後の活動

帰国するとすぐOB会からお呼びが掛かり、関西学生空手道連盟の審判員に関学の代表として出て欲しいと言われ、お受けした。また暫くして、関学の代表理事の任命を受けた。48歳の時に、関西学生連盟の審判長となり、また平成9年に連盟の副理事長を拝命した。

平成10年OB会理事長として、創部50周年行事を挙げる。

平成20年OB会会長として、創部60周年行事を挙げるし、現在は部の常任顧問として在籍している。

又、私が所属する實英会という団体は（財）全日本空手道連盟傘下の剛柔会という団体に所属している。帰国後、海外委員会発足と同時にその事務局を担当し、数年後にはその委員長となり、剛柔会海外支部30数カ国の支部結成に努力した。従って空手道を通じた友人が世界中に広がっている。

まとめ

私が部活動を通じて得たものは、精神的・肉体的な苦痛に耐える忍耐力、向上心、協調性、決断力、そして部を通じて多くの良き先輩、同輩、後輩を得た事です。

練習は厳しく辛いですがそれに耐え、先輩の言う事に素直に耳を傾け、一生懸命、技を工夫し、誠実にやり通す。主将になってからは同輩の協力を得ながら、色々な場面で決断する事の大事さを学習した。空手道部内は勿論の事ですが、部を越えて体育会の他の運動部の諸先輩との繋がりも得る事が出来、更に他の大学の諸先輩との繋がりも得る事が出来るというメリットがある。

大学に入れば、部活動を薦めます。人生の節目での善き人との出会いがあり、両親、兄弟、友人そして結婚後は妻の良き理解を得て空手道人生を過ごせた事に感謝・感謝です。

前川英博

1943年3月30日生 73歳

1965年 関学社会学部卒業

空手道部 OB・OG会 第3代会長

現在 常任顧問